

K S K Q

イマージュ

2017年1月

1991年9月3日 第三種郵便物承認 毎月(1・2・3・4・5・6・7・8の日)発行

謹賀新年

明暗の光の

乱舞に呼应する

我ら

身体あることこそを

祝福する！



西表島の獅子舞

劇団態変

次回、大阪公演

ニライカナイ - 命の分水嶺

3/24 (金) 19:30

3/25 (土) 13:00 / 18:30

3/26 (日) 13:00

HEP HALL (大阪市北区)

『ニライカナイ・命の分水嶺』をやる！ 金満里



態変の誕生にとって、私と沖縄との出会いは大事な要素だった。そして態変として、その沖縄をダイレクトに舞台上で、身体表現してしまおう、というのがこの『ニライカナイ・命の分水嶺』だ。

ニライカナイという言葉に冠に配したこの作品に込めたものは…

沖縄のどの島々でも四方を海に囲まれ、海から自然の猛威の台風に襲われたり、その海に挑み果敢に遠い他国へ漁を求め遠征し、といった生活にとってぬきさし難くある、海が存在、それがある。

沖縄の人々は長い歴史の中で、そんな海に対し、遙か海の方こうからやって来る来訪者への恐れを幸福に変える祈りを込めてきたようだ。ニライカナイは、海を隔ててあるこちらと向こうの間に、まだ見ぬ桃源郷を求める言葉のように捉えられることが多い。しかし実際は、ニライカナイの精神性には、来る者拒まず（拒めず）去る者追わず（追えず）という、どこに行っても海が眼下にあつて何処へも逃げられない立場性への醒めた感覚の裏返し、のように思う。だから、命の価値を、排他的に選別せず全てを包括してしまおうとする、包容力と夢が、このニライカナイという言葉の響きにあると私は思う。

なぜそんなことを思うか、を、態変を思い付いた私の経験を書いてみる。

そこは沖縄八重山諸島の西表である。西表は、私が劇団態変の着想を得た、特別な地だ。西表島は、人為の及ばない広大な原生林と、川と海水が混ざった所に自生するマングローブが広がる、懐深い密林が大半である。



その密林の奥にあるマリウドウの滝が有名な観光地だ。そこへ行く小さな観光船が停まる浦内川の川岸に36年前、私はたまたま一人車イスで佇み大自然の脅威へ対峙する機会を得た。そのときの大自然への恐怖で、小さくひ弱な自分の存在と、大木にしがみつくようにして生きる蟻の姿が、同じようだと思った。

それは、天地がひっくり返る体験だった。具体的に書こう。

大きな木は、自分の体に蟻が這おうが何をしようがお構いなく、自分が生命の全てを形成する一つの宇宙を持っている。蟻は蟻で、そこが木であるかどうかはお構いなく、自分が生命の全てを形成する一つの宇宙を持っている。普通の関係では、これを大宇宙と小宇宙の関係、というのだが、それは傍目で見ただけの一方的な見方なのだ。一つの宇宙観には、大も小もなく、それぞれに独立した宇宙観を持っている。それが必死に生命の営みとして活動していて、絶妙な循環の中にあるだけではないだろうか。そう思うとそれまでの大自然への恐怖感は消え、宇宙的存在としての自然と自分を等価に受け止める「宇宙観の逆転」を実感する瞬間だった。すると次の瞬間へ身体障碍の自分は、その身体のまま、身体表現をやらばいい。きつと、やるんだな。」と閃いたのだ。

それから2年後に私は、劇団態変を立ち上げた。

このような、ある意味で劇団態変表現を生み出す源泉を辿ることになる本作品を、非常に重要な時期だと思ふ今、創ってみようと思ひ立つた。

先に述べたように、沖繩のニライカナイは、来る者拒まず（拒めず）去る者追わず（追えず）、ということ。それは否定形と肯定形の混合の現実感性だ。そこには私自身が、重度の障碍者として持っている、介護者との関係性と同じものでもあるのは明白だ。その現実感に重ね過ぎかもしれない。しかし、実際に昨年起こった、相模原施設障碍者19名大虐殺事件、を思い起こしても、外から来た者に障碍者たちは抗えず、いきなり刃物で斬り付けられ殺傷される、といった許せない事件。そこへ思い至る。



来訪者が振るう、無抵抗な者への、圧倒的暴力に只々やられるしかないのか！ 明と暗、を見据え、

それでも命の価値を誰が決める権利があるのか、という正当な怒りを覚える。

だから、ニライカナイの精神は、生命と死、という深いものを抱え持ち私たちの街へやって来る。

分けられる側ではなく、その意味をひっくり返してしまおう！ そう、そんな舞台でなければ態度は始まらない。

そんな思いで、作品に取り掛かる前、切願として昨年11月に西表島祖納を訪ね、ニライカナイの神みなぎる祭祀「節祭」(シチ)に参列してきた。貴重な祭事との出会いが又一つ、この作品には織り込まれたのだ。

是非とも、みなさんには本公演を見届けに、いらしていただきたい。

特に、これからの若い層に、価値観をぶっ壊す経験を、沖縄の精神に大きく委ねられるようにして、確実に破壊と再生へ向かえる力がこの作品にはある。

写真／西表島祖納2016年節祭(シチ)の風景より



ニライカナイへの道！

小泉ゆうすけ (パフォーマー)

私にとって、『ニライカナイ』の作品づくりは・・・人が抱える根源的な不安や怖れの状態(自分が消される・住む所が無くなる、など)と、対照的に自分のいる場所や世界がクリアーに見える、よく「目が開いた」ような状態。こういうふうにも共存しえないようなことを、同時に抱えながら生きていくための試練のように感じている。

台本初稿を受取り、初めての読み合せをした時に、他のパフォーマーが「これは自分の体験と同じだ！」と驚いているのを聞いた。私自身も自分の体験とあまりにも似通った事柄を感じており、少なからず驚いた部分があった。それは具体的な事例への共感というよりも、大きな抑圧の力によって隔離され、縛られることへの苦しみと、そこからの解放ということが、物語として語られる時にはじめて他者にとっても普遍的なものとして経験できる、ということなのかもしれない。

今回、私がやらせていただくソロシンの役どころも、一見現実とかけ離れていても異色。ちょっとイカれたユーモラスな感じが、しかし現実を超えた現実になっていくように、それまでの緊張感を切り裂くような方法はないかと、試行錯誤中である。例によって波瀾万丈、七転八倒の作品づくりとなっているが、今必要とされる作品だと確信している。あっという間にやって来そうな3月の本番観に来てくださる皆さまとも一緒に、駆け抜けたい！

劇団態変との出会い

村瀬萌 (黒子)

新人黒子として『ニライカナイ』に関わることになった。介護の経験はない。出会うことすべて初めてで、頭も体も大変だ。

最初の講習は、態変の表現の本質と、黒子の任務について。まずはそこから。黒子はただの裏方ではない。役者と黒子との二人三脚がこの舞台表現を成立させるので、責任も重しいし、積極的な参加を求められるという。なんてやりがいのある仕事なんだろう。

次に「抱え」の練習。まず健常者の女性を抱えてみる。え、人間ってこんな重かったっけ？ こんなに難しいんだ。下手にやれば自分の体も壊しかねない。次に役者の方も抱えてみたが、上手くできたのかな・・・？ 不安しかなかったが本人からオッケーサインをもらった時はほっとした。

二度目の稽古で、台本を初めて見た。読み込みとして、みんな読んでそれぞれ思ったことを言っていく。これはこう思った、これはこういう意味ではないか、ここはどうするのか。次第に台本をかみ砕くキーワードが増え、イメージが深まり、思わぬところが繋がりが、広がってゆく。今まで観客として観ていたあの舞台の裏には、こんなに多くの言葉が飛び交ってたんだ。

それにしても本当にみんな全く違う身体。それぞれの身体にそれぞれの動き。それぞれの生活スタイル。正直初めて見る光景だった。

私は人生で初めて「健常者」と呼ばれた。「健常者の方見るな」「健常者まだ手出したらあかん」「健常者と障碍者という立場、役者と黒子、コントロールとアンコントロール、統制と解放という問題に真っ向から向き合う現場をピンピン感じた。

本番まで三カ月。私も信頼できる黒子になりたい。役者の人が自分のことだけに集中できるように、何の心配もいらぬように、安心を与えられる黒子になりたい。なれますように。稽古一日一日、濃い一瞬一瞬が過ぎていく。

ニライカナイ チラシ撮影 漫遊記

11月27日、『ニライカナイ』のチラシ用写真撮影に同行した。その様子をレポートしたい。

まずは稽古場で配置を確認。金さんから出てきたキーワードは「進んでいく感じ」。ニライカナイという言葉には、どこか遠くの海の彼方地の彼方、というイメージを持っている。それくらい途方もなく遠い所へ進んでいく感じ、ということだろうか。

「構図」という言葉も、今回特記すべきキーワードなのかもしれない。個の身体の形やペースの違いをより際立たせ表現してきた態度であるが、今回は、ある一定の枠にあえてはまっつての撮影となる。一定方向を見つめ、一定の間隔を保つ。これは、いままでになく雰囲気になりそうだ。期待が高まってくる。

2カットの構図が決まったところで、いよいよパフォーマーは撮影現場となるスタジオへの出発準備。今回はじめて利用することとなった場所であるが、よりによってこの日は大雨で、車椅子での移動に大変手間取る。メイクや介護のスタッフを含め総勢15名が時間差で出発したが、直線で2キロ程度の移動に1時間ほどかかり、まるでひとつの海でも越えたかのようにヘトヘトになって到着。

しかし、たどり着いたスタジオは真新しい暖かな雰囲気、順番にメイクされるうちにパフォーマーは十分リラックスしていきのだった。準備が整い、真っ白のスタジオに、真っ白のレオタードに身を包んだパフォーマーが並んだ。そして、配置についてシャッターが切られていく。と、あるバランスで6人の視線がすっと直線に重なった。あれれ、と思っっているうちに、ふわりと異界が現れる。6人は6個ではなくひとつの固まりになり、後ろにまだまだ続く何かの存在を彷彿とさせた。そして頭をもたげたその先に、何かがあることが見えてきた。これは、「構図」の魔力なのか。もちろん、静止することが難しい身体を持ち主も多い面々なので、それは一瞬のことであった。そしていくつかの一瞬が切り取られていった。

撮影が終わって外に出ると、すっかり雨は上がっていた。『ニライカナイ』、この作品づくりはいくつもの海を渡っていくことになるよと、誰かに言われた気がした。(スタッフ記)



態変ニライカナイ命 #taihensoul17
SNSでも最新情報を発信しています

劇団態変 賛助会員制度 (2017年度)

次年度に向けて、新規会員／継続会員 へ ご協力お願いいたします。

劇団態変は、2012年4月に賛助会員制度を設けました。行政からの補助金を受けず、身体障害者である態変のパフォーマーが主体となり芸術創造活動を行っていくため、資金面でのご協力を市民の皆様をお願いする取り組みです。会員の皆様の力によって、様々な企画や稽古の場となるメタモルホールを維持し運営することができています。現在、2017年度の賛助会員募集を開始しております。

年会費制です

個人会員	年会費	一口 5,000 円
法人会員	年会費	一口 20,000 円

会員特典があります

- ・ 会員証発行
- ・ 劇団態変 公演映像DVD進呈
(毎年1回 当該年の公演ダイジェスト映像)

個人会員：
チケット料金500円割引 (何度でもご利用可能)
法人会員：一作品 1名ご招待

入会方法

- ①郵便振替
同封の振替用紙に以下をご記入の上、お振込み下さい。
・お名前 ・ご住所 ・お電話番号 (任意)
・メールアドレス (任意)
- ②PayPal
メールアドレスとクレジットカードをお持ちの方は
ホームページよりご利用頂けます。
劇団態変HP→日本語TOP→「賛助会員制度」に
お入り下さい。

劇団態変の活動へのご支援を、
何卒よろしくお願いいたします。

《出版物ご案内》

情報誌イマージュ

劇団態変から編集・発行を続ける情報誌。
現代社会を鋭く切り取り語り合う、ディープな拠点となっています。
年3回お手元に届く定期購読もおすすめ！

最新号

Vol.66
2016 年秋

対談

中山千夏 × 金満里

「個人とコミュニケーションのはざままで」
既存の価値観を転換せよ！



目玉の対談では、中山氏が颯爽と生きる場所を変えながら、いろいろな運動に向き合い続けてこられた話しをお聞きます。
特集テーマは「私たちの生きる場所」。大阪ならではの多様なスペースの現場レポートが満載、映画「さとにきたらええやん」の話題など、旬のスポットも身近にありますよ。勇気の出る1冊です。

〈購入方法〉

同封の郵便振替用紙に以下をご記入の上、お振込み下さい。

- ・ 振込人住所氏名
 - ・ 送付ご希望の住所氏名
 - ・ メールアドレス (任意)
 - ・ 物品名
 - ・ 数量
 - ・ 電話番号
 - ・ 数量
- バックナンバー等、詳細は劇団態変ホームページへどうぞ。

1冊 500円
年間購読 1500円
(年3回・送料込)

★67号は3月発刊予定★

対談ゲストに西表島の石垣金星さん
特集は「沖繩(仮)」「えづ、ご期待！」

2017 新春企画 @メタモルホール

【2/25】『ニライカナイ』プレ企画

HEP HALL での公演に先駆け、態変アトリエ・メタモルホールにて、パフォーマンスを行ないます。初顔合わせとなる音楽家とのコラボレーションは、より実験的に大胆に！作品の製作過程のお話しもちょこっと交えながら、ニライカナイの誕生を待つ前夜祭。お早めにご予約を。

【出演】(身体表現) 小泉ゆうすけ 下村雅哉 松尾大嗣 小林加世子 他
(演奏) サエキマサヒロ SANGNAM 他

【日時】2月25日(土) 開場 14:30 開演 15:00

【チケット】800円

【1/21】ヤasmロコウイチ LIVE

新年最初の劇団態変応援・メタモル企画は、ライブから！

「一年でいちばん寒い頃、

ヤasmロコウイチさんの歌と姫路おでんで、

身も心もあつたまる会、開きます。」

(友情出演：光玄)

【日時】1月21日(土) open 15:30 start 16:00

【参加費】前売 2500円 / 当日 3000円 1ドリンク付・おでん別
(赤ちゃんから高校生まで前売り・当日共に 500円)

【2/4・5】さなぎダンス企画 #10

3組のパフォーマーたちが、メタモルホールを舞台にダンス作品を作る人気の企画。作品はそれぞれ15分程度で、幕間にはダンス批評の上念省三氏によるやさしい解説が入ります。記念すべき10回目！

【出演】古川友紀+出村弘美 / GyaaaO! (川原美夢・宿里美咲) / 小林加世子+松尾大嗣 (劇団態変)

【日時】2月4日(土) 19:00

2月5日(日) 13:30/17:00

【チケット】一般 前売 2000円 当日 2200円
障害者及び介助者 / 25歳以下 1500円

【主催】ダンスの時間プロジェクト

劇団態変第64回公演

ニライカナイ - 命の分水嶺

2017年

3月24日(金) 19:30

3月25日(土) 13:00 ★1 / 18:30 ★2

3月26日(日) 13:00 ★3

受付は開演の1時間前、開場は30分前

★印の公演終演後は、金満里とゲストによるアフタートークを開催します

ゲスト★1 大黒党ミロ氏 (漫画家)

★2 小堀純氏 (編集者)

★3 わかぎふ氏 (劇作家・演出家)

会場 HEP HALL

大阪市北区角田町 5-15 HEP FIVE 8F

06-6366-3636 (11:00 ~ 18:00)

チケット (日時指定・当日受付順自由席)

前売 一般 3,500円

障害者・介助者・シルバー (70歳以上) 3,000円

U-22 (22歳以下) 2,000円

当日 4,000円



赤い観覧車のある「ヘップファイブ」のビル、正面入り口のエレベーターで8階へ！
★阪急梅田駅から徒歩約3分
★JR大阪駅御堂筋口から徒歩約4分

チケットご予約

①イープラス (一般チケットのみ販売・コンビニ等で事前チケット受取りが可能です)
<https://goo.gl/Y3eHbt>

②劇団態変

TEL/FAX 06-6320-0344

E-mail taihen.japan@gmail.com

HP <http://www.ne.jp/asahi/imaju/taihen/>